がん社会を診る

中川　恵一

がん対策 日本は途上国

日本は男性の3人に2人、女性の2人に1人が生涯でがんに罹患（りかん）する世界でもトップクラスの「がん大国」です。

現在、年間約101万人が新たにがんと診断され、37万4000人がこの病で命を落としています。日本のがん死亡数は戦前から一貫して増え続けていますが、欧米各国では年々減少しています。先進国の中で、がん死亡数が増えている国は日本くらいです。

日本の人口10万人あたりの死亡数は米国より約6割も多く、大腸がんによる年間の総死亡数は日米でほぼ同じです。乳がんによる死亡率も、米国では1990年から2013年で34％も減少していますが、日本では逆に45％も増えています。

がんで死なないためには、がんにならない生活習慣と早期発見のためのがん検診の二段構えが大切です。しかし、日本の喫煙率は下げ止まっており、女性では上昇傾向すらみられます。受動喫煙対策にいたっては、世界保健機関（WHO）の責任者から「世界でも最低レベルで前世紀並み」と酷評される始末です。

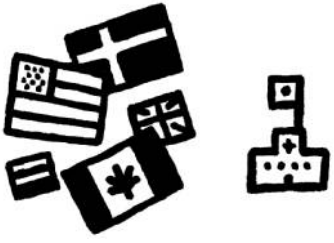
がん検診受診率も欧米の半分程度にとどまっており、2007年に施行されたがん対策基本法で目標とした「受診率50％」は10年たった今でも達成できていません。

多くの臓器のがんで、手術と放射線治療は同程度の効果を示し、欧米ではがん患者のうち、のべ約6割が放射線治療を受けていますが、日本では3割に満たない状況です。

例えば日本では、子宮頸（けい）がん患者の約8割が手術を受けていますが、欧米では8割近くが放射線で治療されています。治療ガイドラインも日本のものは世界標準からずれており、問題があります。放射線治療はほとんどの場合、外来通院で受けられますし、最近では夜間治療を行う医療機関もありますから、がん治療と仕事の両立という点でもお勧めです。

がんはよほど進行しないかぎり、症状の出にくい病気ですが、末期になると骨への転移などで激しい痛みが出ることがあります。特効薬はモルヒネなどの医療用麻薬ですが、日本での1人あたりの使用量は米国の16分の1にすぎません。

がん対策では、日本は発展途上国と言わざるを得ません。（東京大学病院准教授）



イラスト・中村　久美